

メンバーからの声



ハチバス運転手 菊池一俊

常陸太田出身。京都、神奈川、埼玉と移住して31歳の時に帰郷。憧れていた養蜂業を始める。蜂蜜の販路を作るために始めた移動販売「ハチバス」が今では本業。本業でランチを作りながら養蜂、麦の栽培、自動車の塗装までこなす。また経験やアイデアを活かして様々なイベントも仕掛ける。自称「農工商をすべてやる万能運転手」



めざせ百貨店

茨城に戻ってきてもうすぐ8年になる。京都、神奈川、埼玉と住処を移し、茨城に帰ってきた。一時は埼玉への永住を考えたが、やはり故郷は捨てられず、10年余の放浪を経て茨城に戻った。

よく、他と比べて茨城の良い所は?と聞かれると、愛郷心も働いて「なんでも採れる」とか「米が美味しい」とか「自然が豊か」だとか無難に返すのだが、実は狭い日本、どこへ行ってもそんなに大差はない。全国どこでも様々なモノが採れるし、なんでも美味しい。「手つかずの自然」で言ったら秩父や丹沢に完敗する。「東京じゃ食べられない!」なんて言葉も使うが、巨大マーケットの東京には質の高い生産物が大量に流れるから、実際は東京の方が、茨城よりも美味しいものが沢山あったりする。

だから「実は茨城ってこんなに凄い!」なんて言っても、実は茨城人が思っているほど茨城は万能ではあっても優秀ではないのだ。「〇〇の生産量が全国トップ!」なんていうのも、山間地の少ない関東平野の風土で、首都圏という巨大消費地に近い分、流通量も生産量も増えるのが当然なのだ。

だから《とにかく新鮮》なものが《なんでも採れる》《たくさん採れる》という、「実は他でも普通に持ちあわせている所」を「質より量」という激安大型スーパーのようにアピールしてきてしまった茨城のブランド力が最下位なのは当然なのだ。

まずは大量消費される農産物をやみくもにひたすらPRするのではなく、なぜ「茨城なのか」を追求したPRをあらゆる方法で考えていく。そして、それに合わせて「茨城大型スーパー」を「茨城百貨店」にシフトチェンジさせていく事が必要だ。「万能な風土」と「生産量」そして「鮮度」を最初から備え持つ「茨城大型スーパー」に足りないモノ、それはサービスであり接客なのだ。

スーパーも百貨店、両者とも品揃えは同じだが、百貨店なら自らで探さなくても店員が自分に合わせたモノを提案してくれる。好みを覚えてくれたりする。例えば旬の季節になると好みに合わせて用意して連絡してくれる生産者がいたら、田畑のない都会で暮らす方々は季節を知ることが出来る。

消費者の立場になって、生産物を提供したり、提案したり出来るような生産者を育てる。味や栽培にこだわるだけでなく「きめ細かいサービス」で、「顧客満足度」を目指す生産者を育て、サポートしていく。これがアルベトレッペの役割だ。不器用な茨城人は可能性の宝庫なのだ。

メンバーからの声



ライター 山辺吉子

水戸市在住の主婦。かつては編集執筆の仕事に従事。2007年10月から始めたブログ「ほんのきもちです」が今年8月書籍化されたのを契機にフリーランスでライター業を再開。著書「ほんのきもちです 茨城のおいしい贈りもの」(発行/茨城新聞社)



私のアルベトレッペ理想論

私にとってのアルベトレッペは、肉、魚、野菜、米など、茨城ならではの恵まれた環境に育まれた生鮮品の数々です。これほど多品目にわたり安定した高い収穫量を産出している本県は、食料自給率の低いこの国にとって貴重な存在。健康でゆたかな人の暮らしに役立っています。いつでも身近に新鮮で質の良い食品がある暮らしを幸運に思い、ことあるごとに自慢しているのです。

想像を超える大惨事に見舞われた2011年。皮肉にもあの震災を契機に、多くの人が自分たちの生活だけでなく、地域のことや県全体の振興について関心を持つようになりました。当たり前と思っていたことが少しも当たり前ではなかったことに気づかされ、その気づきを明日に生かそうと行動に移しはじめる人が増えていることに、かつてない変化の可能性を感じています。

アルベトレッペはこの震災が起きる以前から、茨城の価値を掘り起こし、発信しようとしているグループです。私としてはこの発信の仕方が、これからの茨城をデザインする要になると思っています。良質な素材の魅力を余すことなく、さりげなく誇張することもなく、そして世界に通用する上質なセンスをもって。こうした発信の仕方を丹念に積み重ねていくことで、茨城らしい実直さや丁寧さがキラリと光る個性となって浮き彫りになってくるのではないかと思うのです。

売らんかなのためのこけおとしやウケ狙いは、瞬間的には人の関心を引くでしょう。しかしそれでは真価を求める人々を感動させることはできません。時間もかかるでしょうし面白みに欠けると感じる方もあるかもしれませんが、「茨城のモノに間違いはない」と思ってもらえる事実を積み重ねていくことが、50年先100年先に通用する本物のブランド力になり得ると信じています。

まずは私たち県民自身が、身近なヒト、モノ、コト、バショに目を向け、その良さを語り合ひましょう。そして茨城は何の特色もないつまらない田舎、そう思っている人たちに新しい見せ方を示していくのです。安直な思いつきや二番煎じの商品化に逃げることなく何事においても上質を目指し、共に成熟していきましょう。その道程においてひとつ、またひとつと、新たなアルベトレッペが現れてくるのだと思います。

縁あってアルベトレッペ第1回目のサロンからの参加です。当初は漠然としてつかみきれなかった夢や希望のようなものが、少しずつカタチを成してきています。皆様もし茨城の未来を明るいものにしたいとお考えでしたら、まずは一度サロンにご参加ください。一緒にカタチにしていきたいと思います。

メンバーからの声



専業主婦 栗野晴美

神奈川県在住。水戸に14年を経て、今春家族の転勤に伴い転出。子育て支援NPOでは、主にまちあそびや子どもの暴力防止プログラムに関わり、県の認証を受けた特別栽培農産物生産者グループを通して、茨城の安心で豊かな食の一端にふれる。現在も5年以上におよぶ水戸芸術館現代美術センターでのボランティア活動を継続中。



私の考えるアルベトレッペ

子育て期のほとんどを水戸で過ごしました。毎年の家族の恒例行事となっていたのは、まちなかにある千波湖での元旦マラソン(父子参加)から始まり、田植え、地引網、機遊び、ただただ水郡線の景観を楽しむための母子日帰り旅など。

食卓には、隣町の契約農家からの農産物が並び、直売所めぐりや港、公設市場での買い物は日常となっていました。

さらに生活の一部となっていたのは水戸芸術館をはじめとする美術館や歴史館・博物館と、すばらしく環境の整った県立・市立、そして郊外にある私設の図書館です。

くわえて、人に宿り、町のあちこちに歴史が刻みしるし魅力でした。国の成りたちからの歴史を後世に伝え残そうとした水戸光圀、日本の文化財保護の礎を築いた岡倉天心の存在。あじさいの名所の程近く、ずらりと整列する371基にもおよぶ幕末の殉難志士の墓前では、いつも背すじがびんとびる思い。豊かな自然、文化、歴史。私の知る茨城は、おなかも好奇心も存分に満たしてくれるところでした。

まず思いだされるのは場所ですが、そこにはたくさんの人の顔を思い浮かべることが出来ます。

伝統ある道場で古武道の流派を守りつつ、勝敗にとらわれず武道に固執しない、真の青少年育成に尽力する先生方。

生産地としては上位にあるにも関わらず、加工品としてのブランドは他県に知名度を奪われてきた大子で、漆の採取から加工まで一貫生産する工房を主宰する木工作家さん。

春に期間限定でオープンするギャラリーカフェに集うティーンエイジャーを見守る大人たち。(そこには一度は地元を離れた、かつてのティーンエイジャーの姿もあります)

観測データは福島からはるかにインドネシアまで点をつなぐ-生物の多様性、豊かな生態系を示す猛禽類を日々観察し続ける獣医さん。評価されることをのぞむでなく、まして報酬でもなく。「彼らは命がけでやってるんだぜ」と教えてくれたのは、古事記を愛読し、古式焼成で創作活動をする作家さんでした。なんてカッコイイ!

離れてみて際立って思い起こされるのは、場を守り、育てていく「無私」の人の存在。それも一時的なものではなく、ずっとずっと続いていくもの。

それが今の、私にとってのアルベトレッペです。

メンバーからの声



茨城大学人文学部教授 西野由希子

専門は、中国と香港の文学の研究、翻訳。2006年4月に茨城大学人文学部と常陸大宮市が地域連携協定を結んで以来、常陸大宮市のまちづくりに関して、さまざまなプログラム企画や実施に携わっている。大分市出身。常陸大宮大使。趣味は、薔薇を育てること(と言えるように勉強中です)。



仲間と智慧が集う場所

「アルベトレッペ」の最初のサロンは、2010年の12月に開かれたとのこと、私がお誘いを受けてはじめてサロンに出席したのは、それよりも少しあとでした。そして一年ほどの間に、私も含め、ここには自然と多くの仲間が集まっています。「アルベトレッペ」って、いったいなんだろう?というある人の問いかけに「それは運動のようなものではないか」と答えた方がありました。なるほど。目指す方向はかなりはっきりしていて、思いを共有できる人たちが集まっているのだけれど、「これをやるための組織」とか「ここがゴール」というのではない、みんなできにかをいっしょに作っていく、そういう意味でしょうか。

毎月一回のサロンには、新しい参加者も来られますが、毎回のように出席されるメンバーがいて、ここに来てその仲間たちと会えるのがうれしい。ふだんはそれぞれに仕事を持ち、生活があり、その中で抱いたそれぞれの思いをここで語り合える、確認しあえるのが楽しい。人が人と呼んだのでしょね、メンバーは、地に足をつけ、自分らしく、心豊かな生活を大切に、自らならんかの行動をしている方たち。豊かな暮らしとは、心の豊かな暮らし、という思いが共通しているようです。

これまで知らなかった分野、経験、経歴をお持ちのみなさんは、その方自身がとても魅力的。もっともっと、みなさんのお話を聞きたい、語り合いたい、と感じます。

なにか実際にやってみないと、実行、実現していかないと、という声もあるだろうと思いますが、実は、このように多彩なメンバーの技、知恵、力、知識がばっと集まれば、実現は、そんなに大変ではないでしょう。でも、長く活動を続け、よりよく発展、深化させていくことは意外に簡単なことではないはずですよ。

私たちは、このメンバーで、なにをやりたいのか、なにができるのか。それも、メンバーが語り合う中ではっきりし、お互いに考えを出し合って具体的な形になっていくのが楽しいと思います。あまり急ぎすぎず、一つずつ活動を重ねていけばいいでしょうし、できるだけじっくり語り合い、ゆっくり学びあう時間を大切にできれば、と思います。心豊かな時間をともに過ごすこと、そこから「アルベトレッペ」は始まるように思うのです。

私の思う「アルベトレッペ」は、仲間と智慧が集う場所。自由に議論し、多様な思いが交差する広場のような。あるいは、経験や知恵を伝え合い、語り合う、囲炉裏ばたのような。